

ゆたかなこころを育てる教材

新ふるさとの心

小学校1・2年



香川県教育委員会

豊かな心を育てる教材 新ふるさとの心

【小学校 一・二年】

◆ わたしたちの せいかつ 1

一(一) 物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。

◆ かえりみちの できごと 3

一(三) よいことと悪いこととの区別をし、よいと思うことを進んで行う。

◆ 空をとべた アオイトトンボ 7

三(二) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。

◆ ならずのかね 11

一(一) 物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わがままをしないで、節度のある生活をする。

◆ この山と青の山 15

二(三) 友達どうしで、互いを認め合い、仲よくしようとする。

◆ あおやぎのこぶ 17

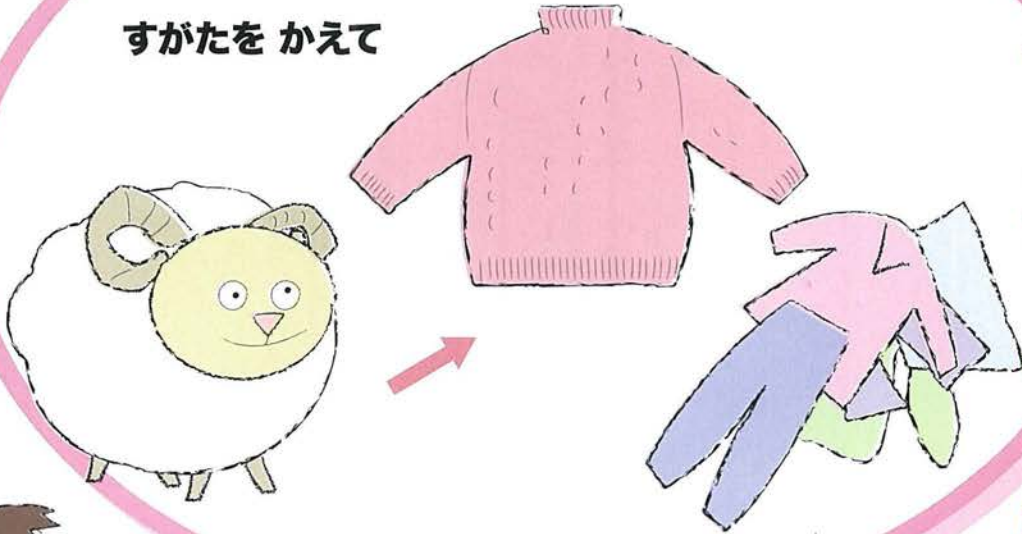
三(二) 優しい心で動植物に接しようとする。

わたしたちの

せいかつ

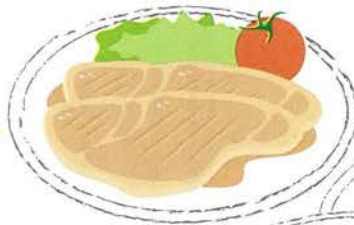
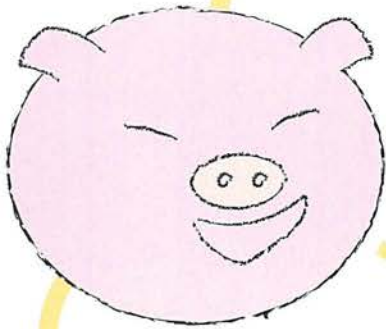
きるもの

すがたをかえて



たべるもの

からだの いちぶぶん

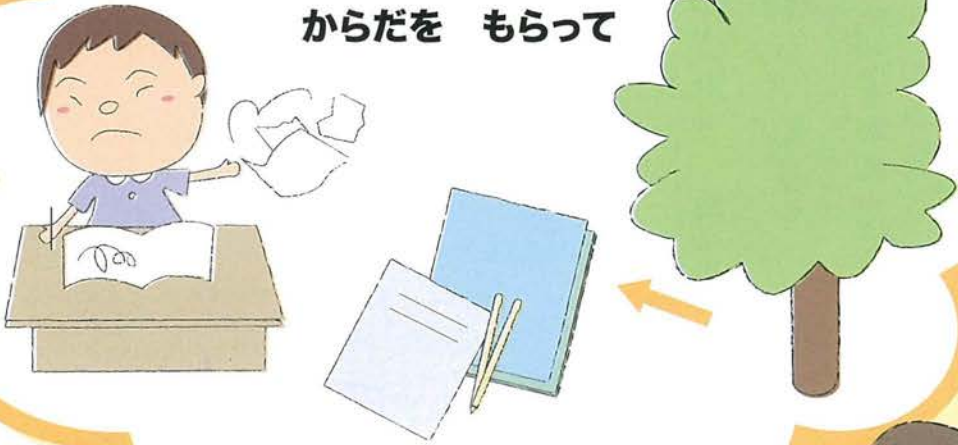


え〜ん!
えん!

〔低学年〕

つかうもの

からだを もらって



ぐねで

いいのかな？

えん！
えん！

みず

ながいたび をして



かえりみちの できごと

森の おくに、たぬきの 家が ありました。たぬきは
いつも なかよしの きつねと りすと、いっしょに 学校
から 帰りました。

夏の あつい 日の 午後、三びきは、学校を出て、森の
家に 帰って いました。みんな せなかに 大きな
かばんを せおっていて、とても おもそうです。と
ちゅうで きつねが、

「ああ、つかれた。ここで 少し 休んでいこうよ。」
といいながら、道ばたの 大きな 石の上に かばん
を おろし、すわりこんで しまいました。

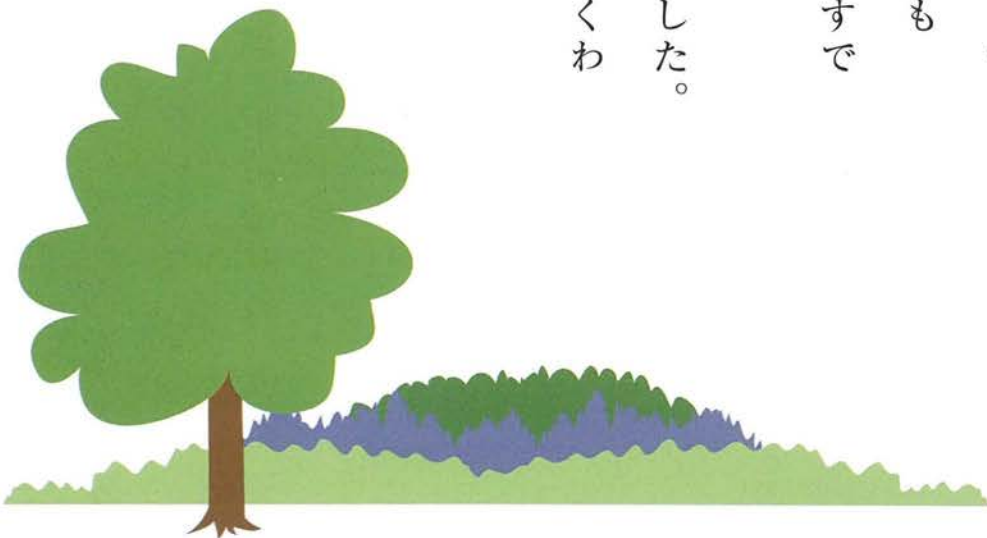


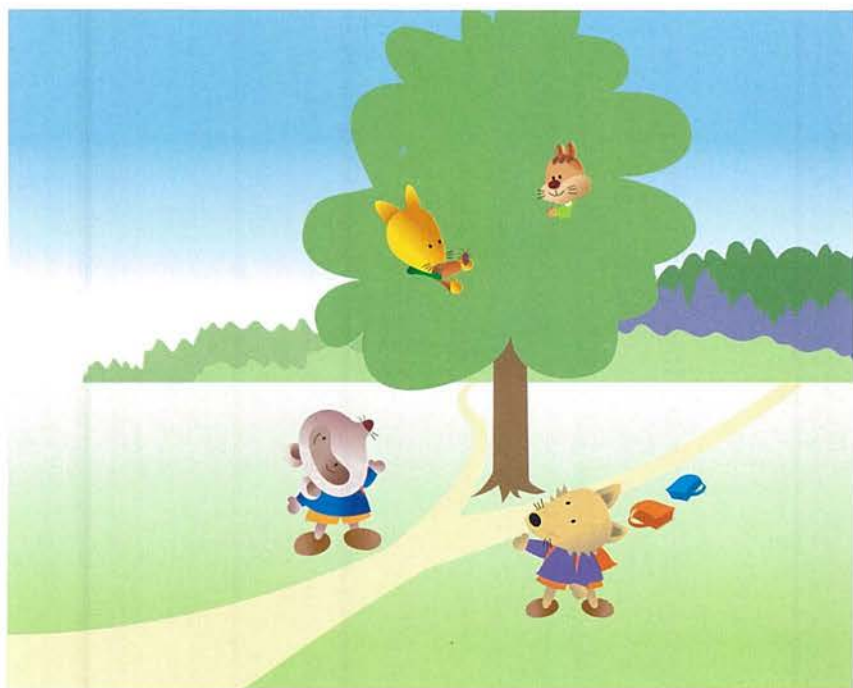
〔低学年〕

先生や 家の 人には、とちゅうで 休んだり、より道をし
りしないで、まっすぐ 通学ろを 帰るように 言われていま
けれど、たぬきと りすは、つかれている きつねに、何も
言うことが できませんでした。二ひきは こまった ようす
顔を見合わせました。

そこへ、後から 学校を 出た おおかみが やってきました。
「森の 入り口に 立っている くぬぎの 木に、大きな くわ
がたが いたよ。とりに いこう。」

「ほんとだ。くわがたがいる。」
きつねは、かばんを おろすと、見つけた くわがたを
つかまえようと、さっそく 木に のぼり はじめました。
しばらくすると、





「ほら、とれたよ。」

と、とくいそうに 大きな くわがたを見せ、

「みんなも 上がって おいでよ。」

と、わらって います。木のぼりの とくいな
りすは、

「ようし、ぼくも つかまえよう。」

そういうと、かばんを おろして、木にのぼり
はじめました。

「だめだよ。早く 帰らないと、くらく なる
よ。」

たぬきは、いっしょうけんめい 止めましたが、

りすは、

「すぐに おりるよ。たぬきさんも 早く おいでよ。」

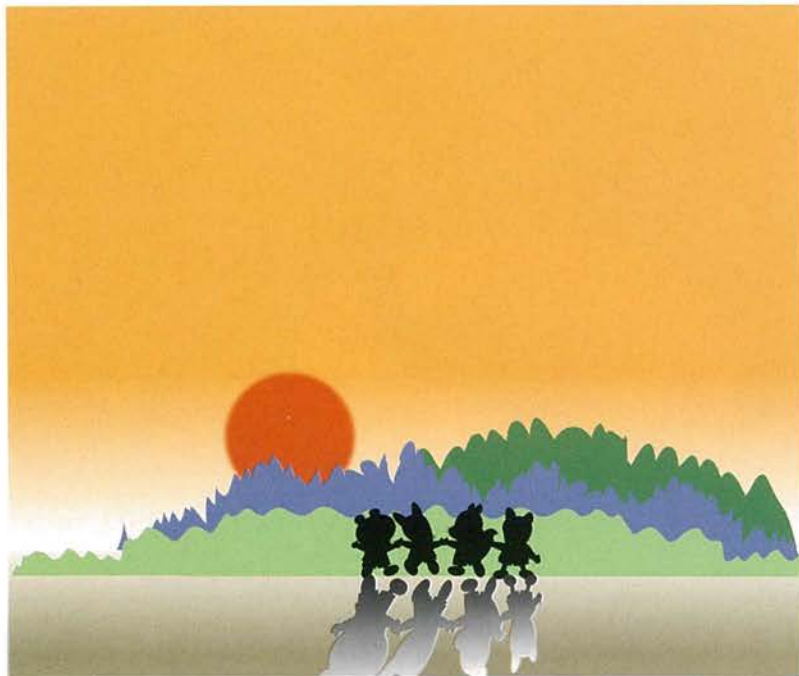
と言いながら、どんどん 高い えだに むかって のぼって いきます。

たぬきは、どうしようか 考えて いましたが、しばらくして、大きな 声で 言いま
した。

「それいじょう のぼると、あぶないよ。」

きつねと りすは、木から おりてきました。四
ひきは、ならんで 森の おくにむかって 歩き
はじめました。

きつねも りすも おおかみも、にこにこして
いました。たぬきは、三びきの え顔を 見て、心
が すうっと しました。



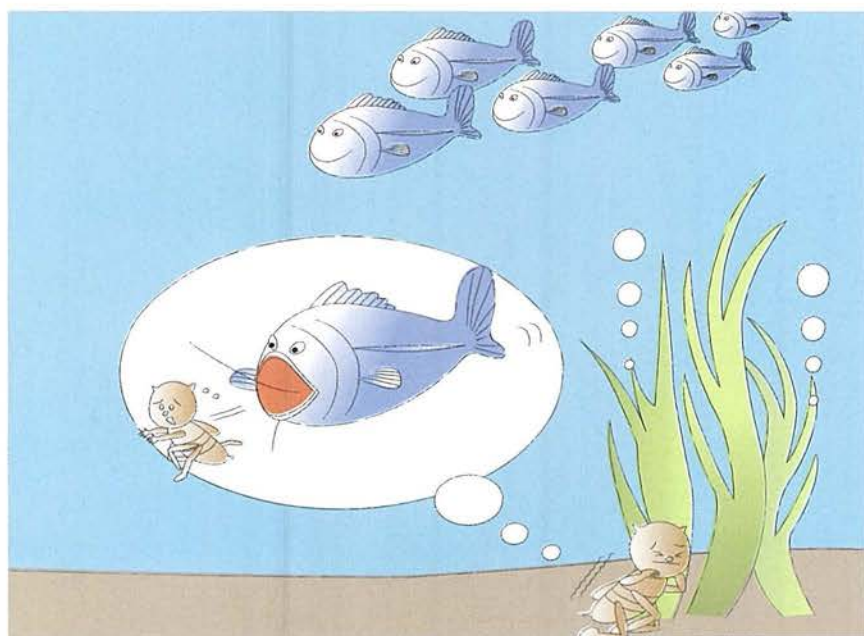
空をとべた アイトトンボ

〔低学年〕

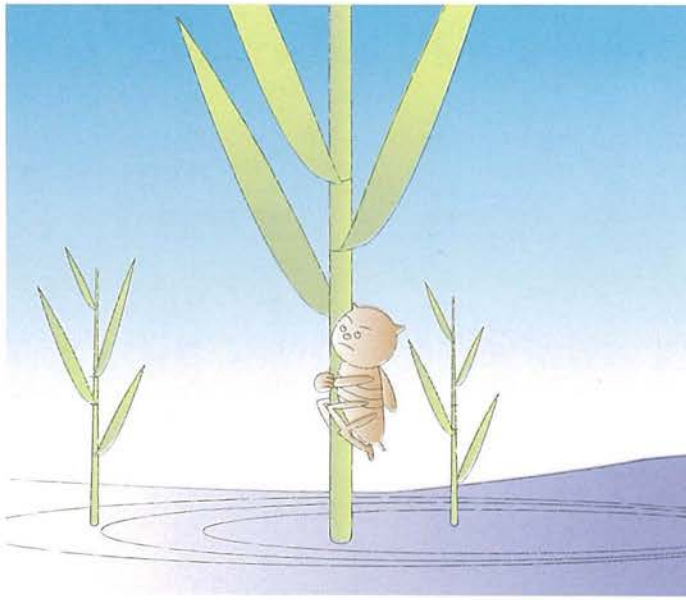
今年も、香川県の池に アイトトンボが
とびはじめました。青く小さなからだ
で 気もちよ
さそうに 池のまわりを とんでいます。

春。たまごからかえった アオちゃんは、小さな
小さな アイトトンボのヤゴです。池の中には、
ヤゴを食べようとしている魚がたくさんいます。

「こわいよう。みんなどこにいるのかな。」
アオちゃんは、たった一人で 見つからないよう
にかくれました。



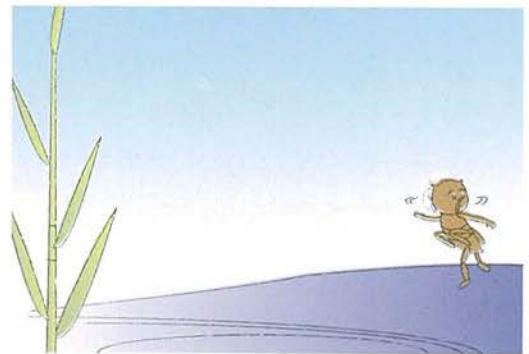
つゆ。大雨が**つづ**きました。くらい池の中で、アオちゃんは、じつとがまんしています。そして、ながい雨のあと、アオちゃんは、大人になるための**場**しよをさがしています。しかし、いくらさがしても、ぴったりのくきが見つかりません。強くて長いあしの草が、なくなっているのです。



「どうしよう。このままじゃ

とんぼになれないよう。」

アオちゃんは、なん日もかけて池のあちらこちらをさがしました。そして、ようやく見つけた一本のくきにはい上がり、さいごの力をふりしぼりました。とんぼになるのです。ヤゴのからをぬいだアオちゃんは、今までとはちがいます。くしゃくしゃだったはねは、しだいにのびて広がり、うつくしい



アオイトトンボに へんしんしていきました。

そして、夏。小さなアオちゃんのからだに 太よ
うの光が、ぎらぎらと てりつけます。

「あついよう。からだがやけそうだ。」

アオちゃんは、ふらふらしながら、林をさがしまし
た。

「早く、すずしくて てきからかくれられる 林を

見つけなくちゃ。」

けれども、林はなかなか見つかりません。やっとの
ことで、池のむこうにある小さな林を見つけました。
秋まで あと少しの しんぼうです。



「コバネアオイトトンボ」



コバネアオイトトンボは、大きさやく3センチメートル。金緑色をしたトンボです。全国で数がたいへん少なくなっているめずらしいトンボです。香川県でも、2か所のところで生きていますが、その場しよでも、どんどん数がへって、いなくなることがしばしばされています。

「コバネアオイトトンボ」の生長に適したため池



コバネアオイトトンボは、ため池をコンクリートで改修することで卵を産むのが可能なカンガレイなどの水生植物が少なくなり、繁殖が困難になったといわれています。

写真は、水生植物が生育し、コバネアオイトトンボの生長に適したため池。

まちにまった 秋がやってきました。アオちゃんは、うれしそうに なかまをさがして 林や池をとびまわります。アオちゃんのはねは、太やうの光をあびて、きらきらかがやいています。

らい年もまた、この池には、新しいのちが 生まれる ことでしょう。



ならずのかね

これは せとないかいの 牛島うしじまという ところの お話はなです。

この しまには むかしから 「ならずのかね」といって、人びとから おそれられている かねが ありました。このかねをつくと、たちまち 大金おおかねもちに なれるが、しんだら おそろしい じごくに おちると いう いったえが あるのです。だから、しまの 人ひとたちは、だれも この かねを ついたことが ありませんでした。

ある 年としの お正月しょうがつの 夜よるの ことです。

ゴーン、ゴーン

と、とつぜん かねの 音おとが 島しまじゆうに ひびきわたり ました。人ひとびとは このぶきみな 音おとに ふるえあがりました。

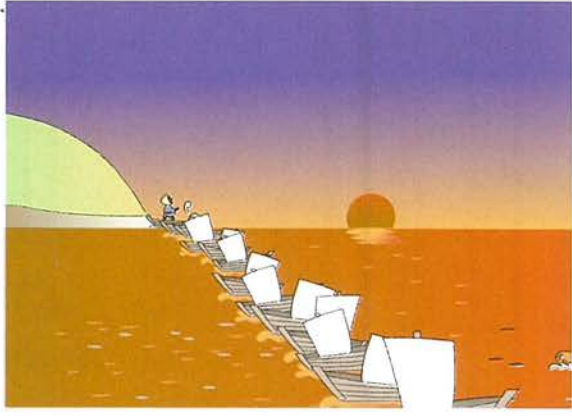


このかねをついたのは、まるおござえもんという人ひとでした。ござえもんは、くまもとの人ひとでしたが、いくら はたらいでも くらしが 楽らくに ならないので この 牛うし島しまに やつてきて りようしを していました。

ござえもんは、このかねの いいつたえを 聞きいて、なんども かねの 下したに 来きて、つこうか つくまいか 考かんがえていましたが、とうとう この夜よる かねを ついたのです。

その あくる日ひから、ござえもんの 船ふねは、たくさん 魚さかなが とれるようになりまし
た。そして、たちまち 大おお金かねもちになり、せとないかい一の 船ふねもちになりました。

大おお金かねもちに なつてからの ござえもんは、毎まい日にち、毎まい日にち、ぜいたくを するようにな
りました。



ある 日ひの ことことです。ござえもんは、

「わしの 船ふねを ぜんぶ 海うみに ならべて ながめて みたいものじゃ。」
と いった 自分じぶんの 船ふねを 日本中にほんじゅうの 海うみから よびもどして せとないかいに ならば
せました。

ござえもんは、山やまの 上うへから この 船ふねを 数かずえはじめました。ところが、ぜんぶ数かずえ
おわらない うちに、日ひが くれてきました。そこで、ござえもんは、

「お日ひさま、しずむのは しばらく まって ください。」
と いった、もっていた 金きんの おうぎで お日ひさまを まねき
かえしました。すると どうでしょう。西にしの方ほうへ しずむは
ずのお日ひさまがまた のぼって きたのです。おかげで ござえ
もんは 船ふねを ぜんぶ 数かずえる ことが できました。

「どうじゃ。わしは、この よで 一番いちばんの 大金おおかねもちじゃ。
お日ひさまでも わしの ねがいを きいて くれたぞ。」
と いったって 言いいました。

やがて、おいわいの さかもりが はじまり、大にぎわいを していた 時のことです。
今まで 晴れて いた 空が きゆうにくもって、かみなりが なりひびき大あらしに
なりました。

ござえもんの 船は、あつという 間に 一そうも のこらず
海の そこに しずんで しまいました。

すべての 船を なくした ござえもんは、「ならずの
かね」の前で いつまでも 立ちつくしていたと いう
ことです。



いいの山と青の山

まるがめへい野に、ふじ山の形をしたいいの山と、なだらかな青の山が、なかよくならんで立っています。

むかし、この二つの山は、なかのよい友だちでした。とても近くにならんでいましたし、よく似た高さの山でしたから、長い間なかよくくらししていました。ある日、いいの山がこう言いました。

「おい、青の山よ。おれは、おまえより強いんだぞ。」

青の山もまけてはいません。

「なに言うんだい。ぼくのほうがもっと強いんだぞ。」

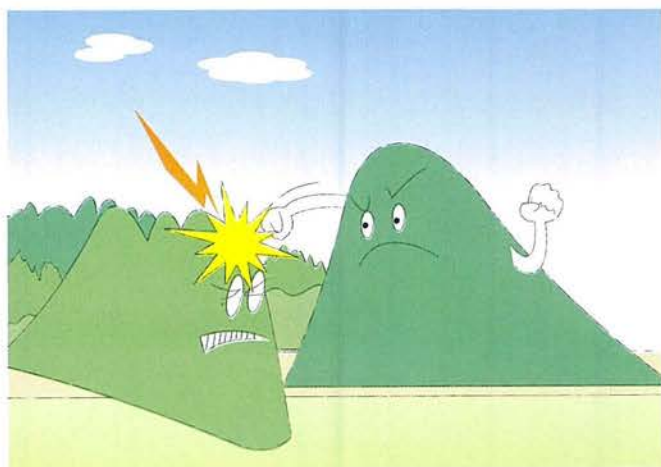
いいの山は、目をつり上げて、

「おれのほうが大きくて、どうどうとして、いるだろう。」

という、青の山もすぐに、

「そんなことあるものか。ぼくのほうが木がたくさん生えて、あとおおとしているだろう。きみなんかより、ずっときれいなんだぞ。」

と、言いかえました。そして、とうとうつかみ合いのけん



かになってしまいました。

いいの山は、かんかんにおこつて、とうとう青の山の頭をスパツと切りとつてしまったのです。頭がなくなつてしまった青の山は、あまりのことに、なきだしてしまいました。

そこへ、友だちの天ぐがやつて来て、

「おい、どうしたんだ。二人ともけんかはやめなよ。」
と、言つて、止めました。

でも、青の山は、ずっとなきつづけています。

どれだけそうして、いたでしようか。いいの山が、はずかしそうに、

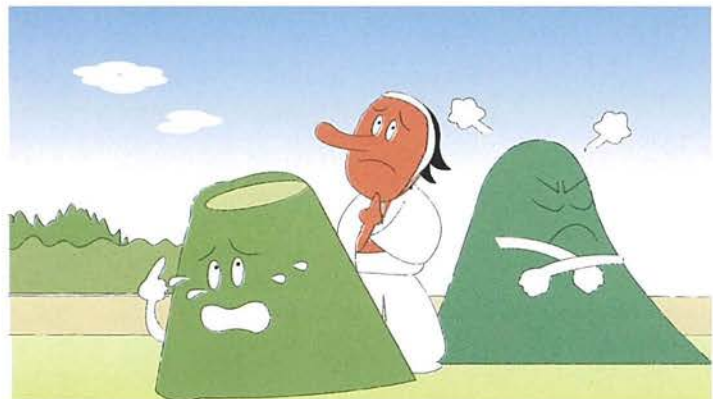
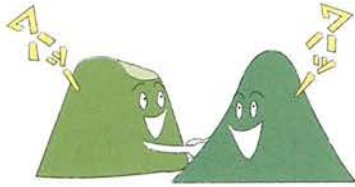
「ごめんね。おれ……。」
後は、言ばになりません。

すると、青の山も、

「ぼくも、わるかったよ。ごめんね。」

と、あやまつて、にっこりわらいました。

こうして、いいの山と青の山は、もとのように、なかよしの友だちになつたそうです。



あおさぎのいど



むかしむかし、善通寺のよしわらの里は、山すそに田んぼが広がるさびしい村でした。村の中ほどには、「せいりゆうさん」とよばれているじん社がありました。その近くはぬまになっていて、一めんにあしというせの高い草が生えていました。

ある日のことです。山のむこうから、一羽の青いさががとんできました。さがは、ぬまのあたりまで来ると、どうしたものが羽をくるしそうにうごかしながら、よろよろと下りていきました。田んぼのしごとをしていた村人たちが、ふしぎに思っ行ってみると、あしのかげでさきほど見たさがが、くるしそうにもがいていました。さがの羽はおれたようにまがり、おなかのあたりはまっ赤なちでそまっています。「これはひどいけがじゃ。」





「いたいだろうに。かわいそうに。」
村人たちは、さぎを あしのはっぱをしいた上に
ねかせました。そして、きず口をきれいにあらひ、
「けがが 早く なおりますように。」
と、羽を やさしく なでてやりました。
つぎの日も、村人たちは さぎのようすを見に
来て、きず口をつめたい水でひやしたり、頭や羽
を やさしく なでたりしてやりました。えさを
もってきて さぎのそばにおいて、そっと帰る村
人もいました。三日たつと、さぎは、少し羽をう
ごかせるようになりまし。五日もたつと、え
さをたくさん食べて すっかり 元気になり、も
うあしのはっぱの 高さまで とび上がれるよう
になりました。

七日七夜たった ある日のことです。一羽のさぎが、
なごりおしそうに 村の上を ゆっくり ゆっくり
回って、やがて村のむこうへ とんで行きました。

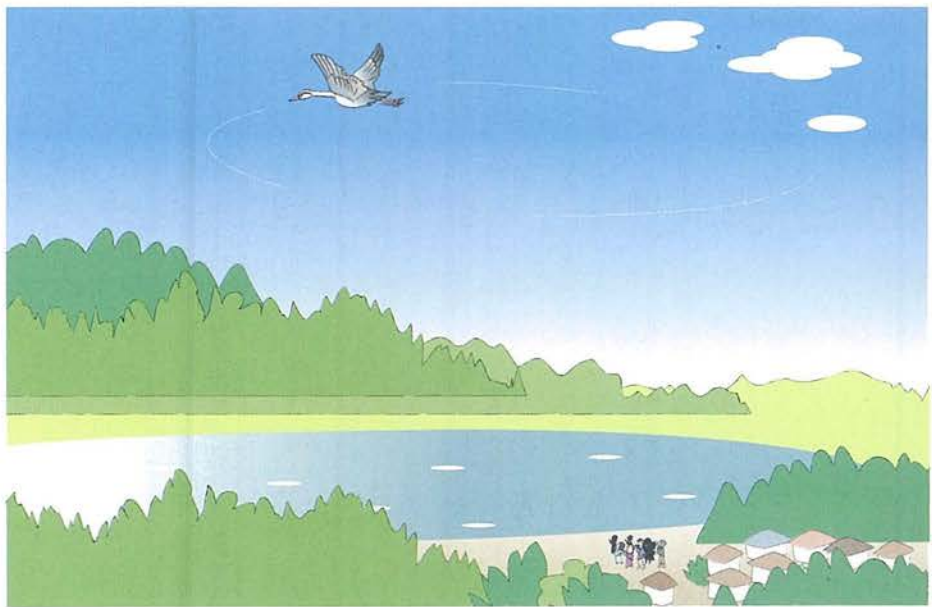
「ああ。あのさぎではないか。」

村人たちは、あしのぬまに かけつけました。やは
り あのさぎの すがたは、どこにも見えません。そ
して、ふしぎなことに、そこには いつの間にか い
ずみができており、水がこんこんと わき出ているの
です。

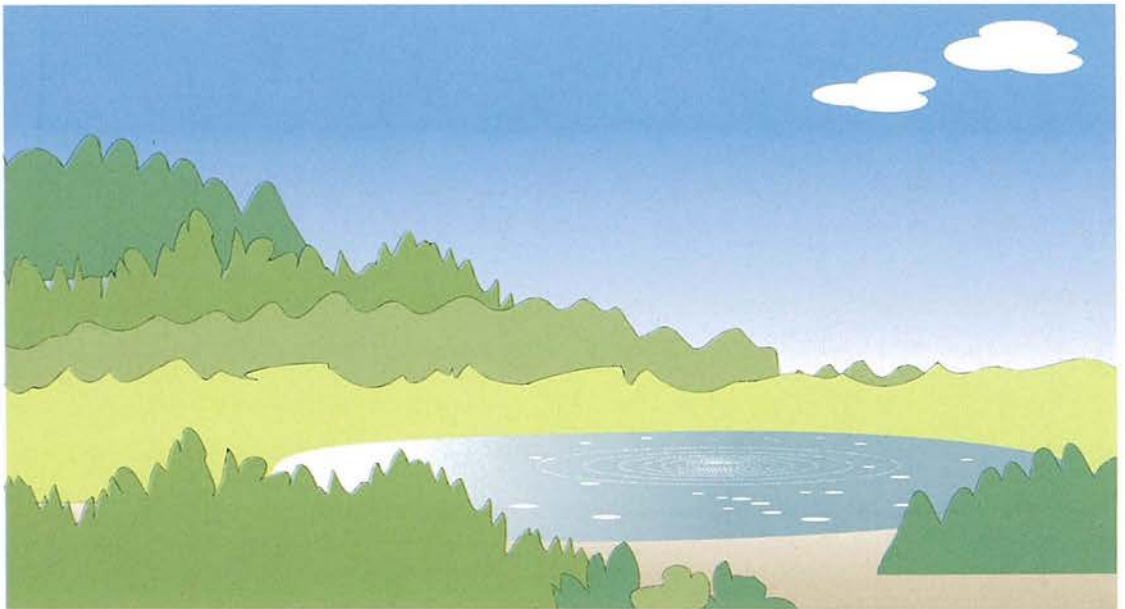
「ああ、なんてきれいな水だろう。」

「それに、こんなに たくさんのお水が わき出るなん
て。」

よしわらでは、水が足りなくて たいへんこまってい
ましたから、みんな大よろこびです。村人たちは、い
ずみの水を みんなで 大切に大切に つかいました。



ある日のことです。目のびよう気でこまっていた人が、このきれいな水で目をあらいました。するとふしぎなことにもとどおり すっかり よくなったのです。このうわさはとなり村にも そのまたとなり村にも広がり、目のびよう気でこまっている人が、たくさんやって来ました。きれいな水で目をあらった人たちは、びよう気がなおり、よろこんで帰って行きました。よしわらの人たちは、このいずみを「あおさぎのいど」とよんで、いつまでも大切にしたいということでした。





1	ねん 年	くみ 組	
2	ねん 年	くみ 組	